

# 聴覚障害児童の助数詞の産出に関する研究

—数える事物の違いと「生き物」の典型性の観点から—

○澤隆史・村尾愛美・大鹿綾・相澤宏充・林田真志・新海晃

（東京学芸大学）（福岡教育大学）（広島大学）

KEY WORDS: 聴覚障害児, 助数詞, 典型性

## 1. 目的

日本語における助数詞は、生物・非生物、事物の大きさ、形状、量などの違いに応じて使い分けられ、その正しい理解や産出には事物に関する知識の獲得が強く関係している。内田・今井（1996）は、おおむね 5 歳半頃に助数詞が獲得されること、数える生き物の典型性によって獲得のしやすさが異なることを示している。聴覚障害児における助数詞の獲得については、音声入力の制限から音便化や連濁といった語形変化に着目することが多いが、種々の助数詞と数えられる事物の概念との関連に関する検討は十分なされていない。本研究では、数えられる事物の違いと「生き物」カテゴリにおける典型性の違いが助数詞の獲得に及ぼす影響に着目し、聴覚障害児童の助数詞の産出について検討することを目的とした。

## 2. 方法

**1)対象:**聴覚特別支援学校小学部に在籍する児童 39 名（2 年：8 名、3 年：6 名、4 年：4 名、5 年：8 名 6 年：13 名）。良聴耳の平均聴力レベルの平均は 95dB (57-129dB) であった。

表1 使用した助数詞と問題文の例

カテゴリ	生き物	個物	量	形状
使用した助数詞	人、羽、匹、頭	個、台、着	皿、杯、箱、冊	本、枚、粒
問題文の例（正答「羽」）	典型性高：すずめが 4（ ）とまっています。 典型性低：動物園で、ペンギンを 4（ ）見ました。			

**2)課題:**助数詞の部分空欄にした文を提示し、適切な助数詞を記述させる課題を実施した。はじめに予備調査として、内田ら（1996）の分類を参考に 26 種類の助数詞を選定し、大学生 71 名を対象に、それぞれの助数詞を用いて数えられる事物を自由産出させた。予備調査の結果、産出される事物数が多かった助数詞の中から、5 カテゴリ、計 14 個の助数詞を選出し、助数詞ごとに 2 問ずつ計 28 の問題文を作成した。なお「生き物」カテゴリの事物については、内田ら（1996）を参考に、典型性が高・低の 2 種類の名詞を各 1 問（全 8 問）設定した。課題は、小集団ごとの一斉テスト形式で実施した。使用した助数詞および問題文の例を表 1 に示した。

**3)倫理的配慮:**調査にあたって、学校長、担任教員および児童の保護者による同意を得た。

## 3. 結果

**1)典型性による成績の差異:**対象児を低中学年（18 名）と高学年（21 名）の 2 群に分類し、各群の平均正答数を典型性ごとに求めて図 1 に示した。群×典型性の二要因混合計画分散分析を行った結果、群と典型性のいずれの主効果とも有意であった（群： $F(1,37)=7.54$ 、典型性： $F(1,37)=14.43$ 、いずれも  $p<.01$ ）。なお交互作用は有意でなかった。以上の結果より、生き物を数える助数詞の産出においては、事物の典型性が影響することが示された。

**2)各助数詞の成績:**各助数詞の平均正答数を求めて、学年群ごとに表 2 に示した。正答数が 1 以上の助数詞は「人」「匹」「個」「冊」「本」であり、身近な生き物や個物を数える汎用性の高い助数詞から獲得されることが示唆された。

**3)助数詞の誤りについて:**誤った助数詞を記入した回答について、誤りの多かった上位 2 つのことばとその使用数を表 2 に示した。ここでは、音便の違いや漢字と仮名の違いは考慮

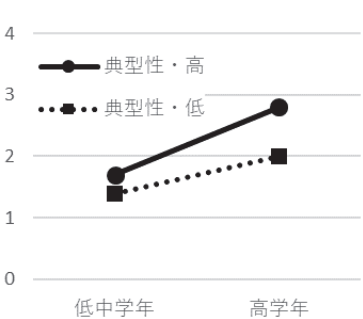


図 1 典型性による成績の差

せずにカウントした。表 2 に示したように、「生き物」についてはカテゴリ内の別の生き物を数える助数詞（羽→匹、匹→人、頭→匹）に誤る例が多かった。また「個物」「量」「形状」では、いずれも「個」「つ」に誤る例が多かった。さらに「生き物」とそれ以外のカテゴリを問わず、「本」を用いる誤りも多い傾向を示した。

表2 各助数詞の平均正答数と誤答例

カテゴリ	助数詞	低中	高	全体	誤り
生き物	人	1.56	1.62	1.59	個(6)・本(3)
	羽	0.28	0.76	0.54	匹(35)・本(4)
	匹	1.06	1.71	1.41	個(6)・人(5)
	頭	0.22	0.67	0.46	匹(33)・個(6)
個物	個	1.22	1.33	1.28	本(10)・つ(7)
	台	0.78	1.14	0.97	個(11)・本(6)
	着	0.00	0.19	0.10	枚(23)・こ(13)
量	皿	0.00	0.24	0.13	個(32)・つ(14)
	杯	0.44	0.81	0.64	個(24)・本(8)
	箱	0.06	0.14	0.10	個 (35)・本(9)
	冊	0.94	1.24	1.10	本(16)・個/枚(6)
形状	本	0.89	1.57	1.26	個(13)・つ(5)
	枚	0.83	1.05	0.95	皿(10)・個(9)
	粒	0.11	0.67	0.41	個(36)・つ(6)

## 4. 考察

分析の結果、典型性が高い事物を数える時の方が、正しい助数詞を産出する例が多いことから、生き物の典型性が助数詞の使用に影響することが示された。またヒトを数える「人」、事物を数える「個」、小動物を数える「匹」の成績が高く、生活上身近な事物や包括的に使用できる「個」の獲得が先行することが示唆された。これらの結果は内田ら（1996）と同様であった。また「生き物」を数える際の誤りとして「匹」が多く使用されていることから、「生き物」が一つのカテゴリとして形成されていることが推察された。一方で、「頭」→「匹」、「羽」→「匹」とする誤りが多いことから、生物学的カテゴリや大小に応じて助数詞を使い分けことが困難であることが示唆された。生き物以外のカテゴリについては、誤った助数詞として「個」や「つ」を用いる例が顕著に多かった。「個」や「つ」は事物を数える時に頻用される包括性の高い助数詞であるため、正しい助数詞が分からない場合に使用されやすいことが考えられる。さらに本を数える際（冊）に「本」、皿を数える際（枚）に「皿」を使用する例のように、事物と同じことばを使用する誤りも多く、聴覚障害児のことばの使用における特徴が示唆された。

**文 献 :**内田・今井（1996）教育心理学研究,44,126-135.  
(SAWA Takashi, MURAO Aimi, OSHIKA Aya, AIZAWA Hiromitsu, HAYASHIDA Masashi, SHINKAI Akira)